

## I サムエル 14 章 1～23 節「主の救いを妨げるものはない」

目に見えない神、主よりも、目に見えて頼りになりそうに思えるものに頼っていることがある私たちに、主はみことばによって教えてくださり、主に対する信頼に立つようにと励ましてくださいます。ヨナタンの信仰の態度に私たちは学ぶ必要があります。

### 1. ペリシテ人の先陣へ（：1～15）

サウルはともいた兵を率いてゲバに行き、そこで息子ヨナタンと合流します。そこには山地から東のヨルダン川に向かって流れる峡谷があり、その南側にゲバやギブアがあり、谷を挟んで反対側の北側にミクマスがあります。ペリシテ人はミクマスに陣を敷いていました。サウルの軍勢はなすすべがありませんでした。

1 節。ヨナタンは決意したことを自分の従者である道具持ちに伝えます。「ペリシテ人の先陣の方へ行こう」というのは、偵察のために行こうというわけではありません。ヨナタンと道具持ちの二人だけで敵陣に斬り込んで行こうというのです。

その後、2 節から 5 節にこの時の状況が説明されています。サウルの陣営にいた兵は約 600 人と繰り返されています。兵が大幅に減っていたことを思い起こさせます。また、サウルの陣営にはアヒヤという祭司がいました。彼はサムエル記の最初に登場していた祭司エリの子孫でした。戦いのために主のみこころを求める役割を担っていたのでしょう。さらに、ゲバとミクマスの間の地形について説明されています。谷の両側にそれぞれ切り立った岩があって、そこを渡って反対側へ行くことが困難な場所であることが説明されています。

改めてヨナタンと道具持ちのやりとりが書かれています。6 節。このヨナタンのことばから彼の信仰について分かります。まず、ペリシテ人のことを「この無割礼の者ども」と呼んでいます。主の民の相続地を奪い取り、主の民を苦しめているペリシテ人は主の敵です。その主の敵どもに斬り込んで行こうとヨナタンは決意しています。自分と従者である道具持ちのたった二人で行くのですが、それは決して無謀なことではないと考えています。「おそらく、主がわれわれに味方してくださるだろう」。主が自分たちの味方であると確信しています。主がのご自身の敵を打ってくださると信頼しています。その信頼は決して狂信的なものではありません。自分の行うことを絶対化していません。

「多くの人によっても、少しの人によっても、主がお救いになるのを妨げるものは何もない」。この信仰によって、敵の先陣に行こうとしています。主が戦い、救ってくださるのなら、兵の数が多から有利とか少ないから不利ということはない、兵の数によって神のみわざが制限されることはないのです。士師記のギデオンがミディアン人と戦ったとき、主が兵を 300 人に減らして、それでも勝利したことを思い起こします。

このヨナタンの主に対する信頼は、兵の数を気にしているサウルとは対照的です。そして、ヨナタンの信仰は彼の従者にも及んでいました。7 節。道具持ちは全面的にヨナタンを支持しました。心を一つにして、信仰によって行動する二人を主は確かに用いられるのです。

ヨナタンは自分の決意したことが主のみこころに叶うことであるかどうか、見極めることを提案します。ペリシテ人の先陣から見えるように自分たちの姿を現したとき、ペリシテ人が「行くまでじっとしている」と言ったら上って行かない、「上って来い」と言ったら上って行く、そのようにして主のみこころを確かめようとします。二人が姿を現すると、ペリシテ人たちは言いました。12 節。主が与えてくださったしるしだと受け取り、二人は主のみこころを確信しました。ヨナタンが言った「主が…渡されたのだ」ということばは直訳すると「主が与えた」となり、それはヨナタンの名前の意味でもあります。

ヨナタンは主への信頼を言い表し、二人は敵の先陣に向かって上って行きました。切り立った岩をよじ登り、そして敵を打ち殺しました。この最初の時に二人が討ち取った敵兵は約 20 人でした。ところが、そのことがペリシテ人の陣営の全体に広がり、恐怖が起きました。「地は震え、非常な恐れとなった」とあります。その地に陣を敷いていた敵の全体が恐れした様子を言い表しています。「非常な恐れとなった」ということばは直訳すると「神の震え」です。すなわち、神による震え、神によって引き起こされた恐れということなのです。

ヨナタンと道具持ちが主のみこころを確信し、主が味方してくださると信頼して敵に立ち向かって行ったことに、こうして主が応えてくださり、救いの御業を行ってくださったのです。

このときヨナタンが主のみこころを確認した方法は、サウルの場合とは違いました。サウルはギルガルで主を待ち、預言者を通して語られる主のことばを聞く必要がありました。ヨナタンの場合は出来事の中に主のしるしを見ることで、彼は確かに主を待ち、主を信頼していたのです。

このことを私たちにも適用することができるでしょう。ただし、ヨナタンのように一つの出来事で判断するのは危険でしょう。私たちは主がみことばによって語られるのを待つ必要があります。また、信頼できる人のことばや状況の変化などによって促され、祈りの中で主のみこころを確認することが大切です。特に、大切なことに踏み出そうとするときには、しっかりとみことばによって示されることを確認する必要があります。

## 2. 一貫していない態度（：16～23）

ペリシテ人の陣営が混乱している様子は、谷を隔てた反対側のイスラエルの見張りにも分りました。「大軍は震えおののいて右往左往していた」のです。その報告を聞いたサウルは、自分の兵の中からある部隊が出て行ったのかどうか確認します。するとヨナタンと道具持ちがいなくなることが分かりました。

その時のサウルの態度を見ると、問題を感じます。サウルは陣営に同行していた祭司アヒヤに、「神の箱を持って来なさい」と命じます。サウルは主のみこころを求めようとしたのでしょう。かつてペリシテ人との戦いに敗れ、神の箱を奪われた失敗から学んでいたはずですが、けれどもこの時、神の箱がイスラエルの陣営に運ばれていました。ここで「神の箱を持って来なさい」と命じたサウルが、それ以前に同じように命じて、陣営に神の箱を持って来させていたと考えることができるでしょう。

しかし、神の箱を自分のところに持って来させるという態度が問題です。神の箱は聖なる神の臨在を象徴するものです。本来は幕屋の奥の至聖所に置かれ、大祭司だけが年に一度、決められたささげ物を献げた上で、近づくことができたのでした。人が聖なる神の臨在の前に進むべきなのです。その逆ではありません。

私たちも主の日ごとに公の礼拝において、聖なる神の御前に近づきます。イエス・キリストによって神の御前に出ることができるので、その恵みを感謝して私たちは主の臨在に近づいていきます。私たちが自分の都合に合わせて、それぞれの場所に神を持って来させるのではありません。もちろん、今は神の恵みによって、キリスト者に聖霊が与えられ、神の臨在が約束されています。それは神の恵みです。私たちが神の臨在を自分に近づかせるのではありません。

神の箱を持って来させ、その前でエポデを身につけた祭司アヒヤに神のみこころを尋ね求めさせようとしたサウルでした。ところが、「手を戻しなさい」と言います。神のみこころを求めようとしたけれども、状況を見て、もう待っていられなくなって、祭司の行動を中断させて、サウルは兵を率いて戦場に出て行きました。

このようにサウルの態度には一貫性がありませんでした。ギルガルでは、主を待ち、主に祈るべきときに、サウルは自ら行動してしまいました。ここでは、主のみわががなされている中で、行動を起こすべきときに、祈ろうとして、しかもその祈りも不十分なままに、行動しました。なんともチグハグな、一貫性のない態度でした。私たちはこのようなサウルの態度を反面教師として、自らの態度に気をつけなければなりません。

ペリシテ人の陣営では「剣をもって同士討ちをしていて、非常に大きな混乱が起こって」いました。このようなパニックになっていたのも、究極的には神から来たものでした。また、苦難の中で敵の側についていたイスラエル人もイスラエルが優勢になるとイスラエルの側につきました。また、ペリシテ人の大群を恐れて隠れていたイスラエル人も、ペリシテ人が逃げたことを聞いて、戦いに戻って来ました。

このようにして、ペリシテ人が混乱し、イスラエルの軍勢が増えて、ペリシテ人は逃げて、イスラエル人は追い迫って行きました。その勝利は主によるものでした。「その日、主はイスラエルを救われた」とあります。主が救いのみわぎを行われるのに、人数は関係ないというヨナタンの信仰の通りになりました。

主の敵が主の民を圧迫していることが、今のこの世で、また私たちの周りで、どのようなことに起こっているのでしょうか。主が救いのみわぎをなさるときには、私たちの方法や能力によって妨げられることはありません。ただ主を信頼し、主のみこころを求めて、行動していきたくと願います。一人でも二人でも、主を信頼し、みことばによって確信を与えられて行動するなら、主が用いてくださり、主の救いのみわぎが行われます。